説教 『　わが名により集まるところには　』

小河信一 牧師

マタイによる福音書 １８章１５節～２０節

15 「兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言う
ことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。16 聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に
連れて行きなさい。すべてのことが、二人または三人の証人の口によって確定されるようになる
ためである。17 それでも聞き入れなければ、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れ
ないなら、その人を異邦人か徴税人と同様に見なしなさい。18 はっきり言っておく。あなたが
たが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、あなたがたが地上で解くことは、天上でも解かれ
る。19 また、はっきり言っておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を
一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。20 二人または三人がわた
しの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」

マタイ福音書18章は、主イエスがその宣教活動の中で、「教会」（18:17）について語られた珍しい個所であると言われます。マタイ福音書16章では、弟子のペトロが主イエスの現前で信仰告白をなした時、主イエスは「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる」（16:18）と宣言されました。

教会の誕生が、主イエス・キリストの十字架と復活の後、50日後、聖霊が激しく降った時に起こったということは、とても重要です。なぜなら、罪人の救いが主の十字架と復活によって成し遂げられたと告白することが、正しい信仰だからです。その上で今、教会の誕生と形成について、一つの福音書をたどるならば、私たちはそれが主イエスの宣教活動にまでさかのぼることを知らされます。

マタイ福音書は、ペトロはじめ弟子たちが信仰告白を基（もとい）として、キリストにつながり、また、キリストのもとから派遣されていきます。そうした中で、主イエス・キリストを中心とする共同体、教会のさきがけがつくられていくのです。

具体的に言えば、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」（マタイ18:1）という主イエスへの弟子たちからの問いかけに内在している罪は、主イエスによって厳しく戒められます。主イエスは、公正なる神の子を前にしながらなお、「自分が一番か」あるいは「あの人の方が上か」という高ぶりやねたみに染まっている弟子たちを忍耐強く訓練され続けます。彼らを見捨てることなく、主イエスは、「正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マタイ9:13）と主の使命を掲げ、自分の欲望や互いの言い争いから抜けきらない弟子たちを徹底

的に指導されます。

今回のマタイ福音書18:15-20の個所は、まさに主イエス・キリストによる教会の形成が物語られています。一人の兄弟が罪を犯しているとき、教会はそれにどのように向き合うかという実際的な課題が挙げられています。

主イエス・キリストは、罪を犯した「あなたの兄弟」あるいは「つまずきをもたらす者」（マタイ18:7）を悔い改めさせ、罪の赦し（マタイ18:21-35）のもとへと回復させるために、弟子たちに説教されています。主は、教会裁判ともいえる裁きの問題について、一人が関わるのか、または、教会全体が関わるのか、それから、どのような段階を踏んでいくのかを教えてくださっています。

この場面で主イエスは、裁きに関わる律法の成就者として、「律法の文字から一点一画も消え去ることはない」（マタイ5:18）ように、旧約における神の言葉（レビ記19:17、申命記17:6、19:15）を重んじられています。この観点に立てば、罪人に対する裁判の目的は、ただ単に教会からつまずきの種や争い事を除去することではなく、神の御心に添って執り行い、そうして神の栄光をほめたたえることである、と分かります。このことは、兄弟への忠告から、天の父による私たちの願い事の成就へ、また、私たちの間におけるキリストの臨在へという、マタイ福音書18:15-20の展開においても明らかです。

さてここで、罪を犯している人を戒めるという主題に添って、旧約、キリスト、そしてパウロから聖書の言葉を並べてみましょう。

レビ記19:17　主なる神からモーセ及びイスラエルの人々へ――

心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。

マタイ福音書18:15　主イエスから弟子たちへ――

兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。

ガラテヤの信徒への手紙6:1　パウロからガラテヤの教会の人々へ――

兄弟たち、万一だれかが不注意にも何かの罪に陥ったなら、“霊”に導かれて生きているあなたがたは、そういう人を柔和な心で正しい道に立ち帰らせなさい。あなた自身も誘惑されないように、自分に気をつけなさい。

上の三つの聖書の言葉から、一つのことが分かります。それは、人を戒める際に、神、キリスト、そしてパウロは、親しく「兄弟」と呼び合う兄弟姉妹の交わりを大前提としているということです。

もちろん、それは単なる親族的な呼称ではありません。「兄弟」とは、主イエス・キリストが、その十字架と復活をもって罪と死から救い出された心の貧しい者、また、その救い主・キリストの御前に、何ものも差し出すことができず、ただ悔い改めをもってひれ伏している者のことです。

今、一人の兄弟が私たちの交わりからさ迷いだし、皆の目から見失われようとしています。その時、主なる神はまさに私たちを、相手方の「兄弟姉妹」として用いられます。本来は愛も義(ただ)しさも持ち合わせていない私たち「罪人のかしら」（テモテへの手紙 一 1:15）が、兄弟を罪のどん底から神のもとへ立ち帰るよう、「戒める」の現場で働かせていただくのです。今こそ、すべての人の罪を贖われたお方、公正なる裁き主であり赦し主であるイエス・キリストに従うことが求められています。

レビ記19:17「同胞を率直に戒めなさい」は、ひたすら戒めに戒めるというのが原意で、「戒め」に専念することが勧められています。軽率に人の罪を批判したり、陰でうわさしたりするのとは、正反対です。

さらにパウロは、率直に兄弟を責めるばかりでなく、「柔和な心で」向き合うように教えています（ガラテヤ6:1）。恐らく、頑(かたく)なになっている相手に「柔和な心で」忠告するというのは難しいことでしょう。とかく、一方では周りの人から、「優しすぎる。そんな緩(ゆる)やかなやり方では……」と非難され、他方では相手から、軽く受け流されてしまうことになりかねません。主の支えのうちに、聖霊に支配された謙遜な心が、その中にある柔和さこそが、必ず相手に通じるということを信じられるか否かに掛かっています。

いずれにせよ、同時に「率直さ」と「柔和さ」を併せ持つことは、主イエス・キリストの奇(くす)しき力に拠ることなのでしょう。

ところで、罪人を戒めることに関する旧約とパウロの二つの勧めに比べると、主イエス・キリストのそれは大きく相違する点があります。すなわち、主イエスの教えは、戒めること自体と共に、その先を見据えて、弟子たちを励ましているのが特徴的です。もう一度読み直しましょう。

マタイ福音書18:15――

兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで忠告しなさい。言うことを聞き入れたら、兄弟を得たことになる。

「二人だけのところで」――これは、他の人には知られず、一対一で向き合い、ただ上なる神のみがご覧になっている場所で、ということです。神の御前に、罪があらわにされること、そして当事者がそれを認めることが大事なのです。

マタイ18:15の終わりの部分を補って言えば、「もし彼があなたに聞き従ったならば、あなたはあなたの兄弟を得たことになる」となります。或る英訳（TEV）だと最後は、‘ you have won your brother back. ’ です。

‘ win ’「勝つ」を含む熟語 ‘ win … back ’「…を（努力の末に）取り戻す」による翻訳はとても優れているように思います。自分流に解釈すれば、「“霊”に導かれて、いったん迷い出た兄弟を取り戻し、主の勝利を輝かせる」――それが、私たちが兄弟の罪をあらわにする真の目的であるということです。

神に栄光を帰すということを第一に置くとすれば、主イエス・キリストに従い、主に倣(なら)うことこそが、私たちの最善の道であると分かります。そして、罪に陥っている兄弟または隣人を戒めるのが、茨(いばら)の道であることも分かります。

マタイ福音書18:16-17――

16 聞き入れなければ、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。すべてのことが、二人
または三人の証人の口によって確定されるようになるためである。17 それでも聞き入れなけ
れば、教会に申し出なさい。教会の言うことも聞き入れないなら、その人を異邦人か徴税人と
同様に見なしなさい。

罪人が悔い改める時は、あるいは、兄弟姉妹の間に和解がもたらさせる時は、主の勝利が輝く時にほかなりません。私たちがその時を定めることはできません。私たちは、「二人だけ」から、「ほかに一人か二人、一緒に」へ、そして、「教会」（実際上は役員会でしょうか）へと巡る中で、罪人が連れ戻される喜びの時を待ち続けます。

マタイ福音書18:19――

また、はっきり（確かに / アーメン）言っておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。

ここで私たちは、罪を犯している兄弟を戒める際に必要とされる率直さも、また柔和さも、どれだけ熱心に祈っているかに拠(よ)ることが分かります。

まず祈って、裁きまたはとりなしの現場に向い、その後また、祈ります。独りではありません。

「あなたがたのうち二人が……心を一つにして」と書いてあります。私たちはキリストにあって、さまざまな賜物を持つ、言い換えれば、この世的には性格や境遇など違いの大きい「兄弟」とすでに「兄弟である」または「祈りの友である」という確信を持つことです。そうして、離れ去り迷いかけている「兄弟」に関わっていくのです。ここでも、天の父の御心が成るように祈り通された主イエス・キリスト（マタイ26:39）が、私たちを導いてくださいます。

父なる神は、どんな願い事もすでにかなえられている、成就しているという主にある確かさ（アーメン）をもって、私たちが神の勝利に連なることを喜ばれます。

マタイ福音書18:20――

（というのは）二人または三人がわたしの名によって集まる（原文：集められた）ところには、わたしもその中にいるのである。

なぜなら、「わたし（キリスト）もその中にいる」からであると結ばれています。天の父への祈りの成就は、私たちの間におけるキリストの臨在によって保証されています。

「真ん中」に、主イエス・キリストがおられます。私たちは、主イエスが真ん中におられる教会に招かれ、集められた者たちです。私たちの兄弟姉妹の交わりは、一人の「兄弟を得たこと」にならないまま不安定かもしれません。しかしすでに、主イエス・キリストがその「ど真ん中」に、和解のしるしとして十字架を建ててくださいました。

赦し主であるイエス・キリストに従う教会には、罪を犯している兄弟の罪を赦す権威が授けられています（マタイ18:18）。主イエスは弟子たちを呼び集め、そして、彼らに向かって、罪人のところまで「引き返して行け！」（マタイ18:15）と命じられました。

そこで、私たちは教会へ罪人を招く外に向かっての伝道について、洞察を与えられるのではないでしょうか。もし、私たちがすでに洗礼を受けた、すなわち、神に救われた兄弟であり罪に陥っている兄弟のもとへ遣わされることに励むならば、私たちは、まだ救われていない、すなわち、罪からの解放という福音を知らない人々のもとへ出かけることにも熱心になるのではないでしょうか。

「迷い出た一匹を捜しに行く」（マタイ18:12）という教会の危難は、教会の兄弟・姉妹が改めて一つとなる好機であると共に、外へ出て行って、新たな兄弟・姉妹を得て、主にある喜びが増し加えられる伝道の好機でもあります。